
発展学習2-1 レスポナントとオペラントの複合

行動分析学の入門書では普通、レスポナント行動とオペラント行動は以下のように定義されています。

レスポナント行動：

誘発刺激（無条件刺激または条件刺激）によって誘発される行動

オペラント行動：

誘発刺激を必要とせずに自発される行動

しかしながら、日常行動は、レスポナント的な反応とオペラント的な反応から複合的に構成されていたり、オペラント行動の入れ子の中に、部品のような形でレスポナント行動が含まれている場合もあります。さらに、一連の条件づけ操作の中でレスポナント条件づけとオペラント条件づけの両方が行われるという場合もあります。いくつか例を挙げてみましょう。

- (1)呼吸活動はレスポナント行動ですが、オペラント行動として、深呼吸をしたり、短時間呼吸をとめたりすることができます。
- (2)鳥が木の枝に止まる行動はオペラント行動ですが、止まったあと、バランスをとるために足で枝を掴む行動はレスポナント行動と言えます。
- (3)有害なモノを食べたあと胃けいれんが起こって吐き戻すという行動はレスポナント行動です。それと同じモノの味やニオイに対して吐き気を生じるようになるのもレスポナント条件づけと言えます。しかし、それを再び手にとって口に入れる行動が起こらなくなるのはオペラント条件づけの弱化（嫌子出現による弱化）によります。
- (4)熱いものを触った時に手を引っ込める行動はレスポナント行動です。その後再び手を触れないのは、触れるというオペラント行動が弱化されたためと言えます。
- (5)牧場の犬に、笛を吹いてから餌を与える訓練を行うと、その犬は笛の音が聞こえた時に駆け寄ってきます。この行動自体は、笛の音を弁別刺激としたオペラント行動であり、餌という好子の出現によって強化されたと言えます。その犬は（餌が与えられず）笛の音だけを聞いてもヨダレを出すようになるでしょう。これは言うまでもなくレスポナント条件づけが同時に起こっていることを意味しています。

以上が示すように、それぞれの行動を、レスポナント行動であるのか、それともオペラント行動であるのか、というように二者択一型に分類することは困難があります。むしろ、その行動は直後の結果（後続事象）によって変容するのか、それとも全く変容しない

のかといった側面に注目し、前者であれば少なくとも部分的にオペラント行動の側面があると考えerほうが無難と言えます。

トールネケ(2010, 翻訳書 2013)は、レスポンドとオペラントの区別について以下のように述べています。

The terminology of behaviorism is simply a way of speaking about this issue, and we employ it because it is useful. It serves our purpose to distinguish between operant and respondent in this way. Although these processes coexist in the web of events we are trying to understand and influence (more on this below), for the sake of clarity I will isolate what we think of as respondent processes. 【原書 20 頁】

... 何がオペラントで、何がレスポンドなのかを区別するのも、私たちの目的である「予測と影響」に有用だからにすぎない。オペラントとレスポンドの 2 つのプロセスは、私たちが「予測と影響」を与えようとしている一連の出来事の中に、共に存在している（詳細は後述）。しかし、話を明確にするために、レスポンドのプロセスと考えることができるものを取り出しているだけのことなのである。【翻訳書 28 頁】